

【やまなし 二 十二月後半】の解釈

三重 長谷川浩

(23)

.....

「かわせみだ。」

子どもらのかには、首をすくめて言いました。

(24)

お父さんのかには、遠眼鏡のような両方の目をあらんかぎりのぼして、よくよく見てから言いました。

「そうじゃない。あれはやまなしだ。流れていくぞ。ついていってみよう。ああ、いいにおいだな。」

(25)

なるほど、そこらの月明かりの水の中は、やまなしのいいにおいでいっぱいでした。

(26)

三びきは、ぼかぼか流れていくやまなしの後を追いました。

(27)

その横歩きと、底の黒い三つのかげ法師が、合わせて六つ、おどるようにして、やまなしの円いかげを追いました。

(28)

まもなく、水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青いほのおを上げ、やまなしは横になって木の枝に引っかかって止まり、その上には、月光のにじがもかもか集まりました。

「どうだ、やっぱりやまなしだよ。よく熟している。いいにおいだろう。」

「おいしそうだね、お父さん。」

「待て待て。もう二日ばかり待つとね、こいつは下へしずんでくる。それから、ひとりでおいしいお酒ができるから。さあ、もう帰ってねよう。おいで。」

(29)

親子のかには三びき、自分らのあなに帰っていきます。

(30)

波は、いよいよ青白いほのおをゆらゆらと上げました。それはまた、金剛石の粉をはいているようでした。

【私の解釈】

[問題となる箇所]

21段落で、お父さんのかにが出てきたのは、「もうねろねろ。おそいぞ。あしたイサドに連れていかんぞ。」という言葉から、夜更かしをしていた子どもたちを叱って寝させるためである。ところが、

24段落では、「…ついていってみよう、…」と子どもたちを誘っているのが、変である。そこで、2つの問題ができる。

[問題1]

・「ついていってみる」とは、ついていくことで、何を確かめようとしたのか。

[問題2]

・確かめる作業に、なぜ子どもたちを誘う必要があったのか。

[考察]

22、23、24段落で、トブンと落ちてきた黒い丸い大きなものが何か、子どもらとお父さんとは見解が分かれている。

子どもら＝かわせみ

お父さん＝やまなし

したがって、「かわせみかやまなしかを、子どもたちにはっきり分らせるため」と考えるのが、自然であろう。事実、試し終わりの場面である28段落の「どうだ、やっぱりやまなしだよ。…」という言葉から、「おれの言った通りだっただろ。」という気持ちが読み取れる。

どうだ＝それ見たことか

やっぱり＝おれの言ったとおりに

よ＝主体の判断を相手に強く押し付けようとする気持ちを表す

ところが、子どもたちはお父さんに何の反応も反論もしない。それは、25段落「なるほど、そこらの月明かり水の中は、やまなしのいいにおいでいっぱいでした。」で、すでにやまなしであるというお父さんの判断に納得していたからである。子どもたちの「おどるようにして、やまなしの円いかげを追いました」からも、かわせみではないかという心配などは全く感じられない。お父さんのかにも、子どもたちがやまなしであることを全く疑っていないことは感じ取れていたはずである。にもかかわらず「どうだ、やっぱりやまなしだよ。…」と言わなければならなかったのはなぜか。 [問題3]

「どうだ、やっぱりやまなしだよ。」と、後の「よく熟している。いい匂いだろう。」とのつながりが分からない。お父さんは、なぜ「よく熟している。」と言ったのか。 [問題4]

自分が「…いいにおいだろう。」と言ったことに対して子どもが「おいしそうだね、お父さん。」と返すのは、全く自然な流れなのに、「待て待て。…」と慌てた様子になるのは不自然である。

「…いいにおいだろう。」と自分が反応を求めておきながら、「おいしそうだね、お父さん。」と返した子どもに対して「待て待て。…」と慌てたのはなぜか。 [問題5]

[考察]

「待て待て。」の後に、「…もう二日ばかり待つとね、こいつは下へしずんできくる。それから、ひとりでおいしいお酒ができるから。…」とあるので、お父さんが慌てたのは、子どもたちに食べられたらお酒が飲めなくなるからであることが分かる。お父さんは、お酒をとて楽しみにしているのである。だから、お父さんはやまなしの状態（熟し具合）を確かめに行き、いつ頃お酒が飲めるのかを確認したかったのだと考えられる。（お父さんの本当の目的）しかし、子どもに「もうねろねろ。」と言った手前、自分だけがやまなしを追って出かけていくわけにはいかなかった。そこで、子どもを「かわせみかやまなしかを確かめるため」という名目で一緒に連れていき、自分の本当の目的「やまなしの熟し具合を確かめるため」を達成しようとしたのである。（お父さんの本当の試し終わり＝「よく熟している」）

「どうだ、やっぱりやまなしだよ。」と言ったのは、「かわせみかやまなしかを確かめるため」にやまなしを追ってきたのだという名目からである。加えて、「どうだ、やっぱり…だよ。」と自慢げに言ってる大人気ない様子から、お父さんがお酒が飲めることの喜びから有頂天になっている姿も想像できる。きっとやまなしを追っている間も、お酒のことで頭がいっぱいで、やまなししか目に入っておらず、子どもたちがやまなしであることを疑っていない様子であることにも気づいていなかったのであろう。

小さな谷川の底で生きるかにの親子が、時に自然の厳しさを目の当たりにしながら、一方で自然の恵みを享受して、儉しくも美しく生きている様子に共感する作者の思いを感じる。